

コロナ禍で思う宮沢賢治

京都薬科大学 名誉教授 桜井 弘

心象スケッチ『春と修羅』と童話集『注文の多い料理店』の2冊の書籍を生前に出版して37歳の若さで亡くなった岩手県花巻出身の詩人・童話作家の宮沢賢治(1896～1933)は、亡くなる2年前に有名な『雨ニモマケズ』を書きました。死を予感したのでしょうか？黒い小さな手帳に鉛筆で書かれたこの詩は、おそらくわが国でもっともよく知られた詩の一つではないかと思えます。

詩のこの部分のみを読めば、自らの生涯の反省と戒めを書いているように感じられますが、賢治を理解するには、この詩の最後の7行を忘れてはなりません。7行の中央には「南無妙法蓮華経」、両脇に4人の菩薩、多宝如来と釈迦牟尼仏の名前が書かれています。また、亡くなる直前には、「国訳妙法蓮華経を1000部印刷して知己の方々にあげて下さい。」と父に頼み息を引き取りました。賢治はこのようにして法華経信仰者として生涯を閉じたと考えられます。

賢治は、幼少のころは宮沢家の浄土真宗を信仰し、盛岡中学校と盛岡高等農林学校時代にはキリスト教の教会を訪れ二人の牧師と親しくし、花巻農学校の教諭時代にも自宅近くの敬虔なキリスト教徒とも親交を深めていました。賢治はいわば信仰の実験をしていたことも忘れてはならないことと思えます。

賢治は、盛岡中学生時代に出版された石川啄木の『一握の砂』を読み、啄木に憧れ、短歌を制作しはじめます。盛岡高等農林学校時代には友人4人で同人誌『アザリア』を発刊して、短歌、詩や小説を発表しました。中学生の終わりのころ、法華経を信仰しはじめて父との折り合い



写真1. 宮沢賢治



写真2. 賢治像と旧住居

が悪くなりました。高等農林学校の研究生を終えたころ、東京へ家出し法華経の団
体で布教活動をさせてほしいと要請しますが、法華経を広める方法として童話などを
著わす「法華文学」への道を進むよう教えられました。こうして賢治は、本格的な詩
人・童話作家への道を進むこととなりました。

一方、賢治は幼少のころから石集めが好きで、周りの人たちから「石っ子賢さん」と
よばれていました。高等農林学校と研究生時代には農芸化学を学び、地質調査、
鉱物採集と分析など一流の知識・技術を幅広く身に付け、花巻農学校の教諭として
最新の科学を学び教え、羅須地人協会をおこした折には肥料設計・農薬指導、さら
に東北砕石工場の技師として石灰肥料の指導と販売など化学の世界を歩んできま
した。したがって、賢治は自らを科学者(化学者)として捉えていました。

信仰と科学をベースとして生き、詩と童話を著わしていた宮沢賢治が、妹の発病
を機に、妹と自らの感染症にどのように対処していたかを紹介させていただきます。



写真3. 賢治が通った盛岡高等農林学校本館

今からおよそ100年前の1918(大正7)年12月27日早朝、宮沢賢治(22歳)は
母・イチ(41歳)とともに、高熱で発病した妹・トシ(19歳)の看病のため、花巻から上
野に到着して小石川区の旅館に入りました。トシは、当時東京の日本女子大学の4
年生の学生でした。賢治は早速妹を入院先の永楽病院(東大付属病院小石川分
院)に見舞い、その様子を花巻の父・政次郎(44歳)への手紙に、次のように報告し
ています。

「拝啓 今朝無事着京致し候。午後二時永楽病院にて面会仕り候処別段に顔色も悪からず言語等常の如く御座候。昨日は朝三十八度夜三十九度少々咽喉を書し侯様に見え候。……」

賢治は母を先に帰し、以後一人で毎日トシの病室に通い、体温の変動など容態を大変詳しく父親に伝えています。それによると、発熱は心配した腸チフスによるものではなく、翌年の1919年1月4日の手紙では、「熱の来る所は割合に頑固なるインフルエンザ、及肺尖の浸潤によるものにて今後心配なる事は肺炎を併発せざるやに御座候」ということでした。さらに、トシが「伝染室」に入れられているとあり、「只今とし子は伝染室中にて、最、重患なる為に医員の注意は殆んど集中し居り候由決して御心配無之候」とあります。

賢治も妹が腸チフスでなかったことに安心しましたが、インフルエンザであり世界的に流行していた伝染病としては捉えていなかったようです。先の1月4日の手紙の最後に次のようにも書いています。

「尚私共は病院より帰る際は予防着をぬぎ、スプレーにて消毒を受け帰宿後塩剥えんぼつにて咽喉を洗ひ候。旁々御心配被下間敷候。」(くたさいませんように)

「塩剥」とは塩素酸カリウムのことで、当時うがい薬として使われていました。病院の「伝染室」の出入りには専用の予防着をつけ、消毒していたことがわかります。塩素酸カリウム $KClO_3$ は右の構造をしています。

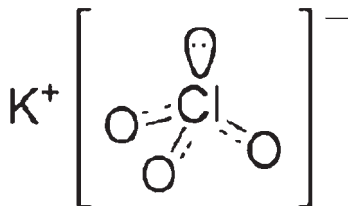


図. 塩素酸カリウム $KClO_3$ の構造

現在の新型コロナウイルスの消毒には、石鹼、熱水、アルコール、洗剤(界面活性剤)、次亜塩素酸ナトリウム水溶液、次亜塩素酸水などが使われています。

1月6日の手紙には、食べ物のことなども書いています。

「然るに昨夜は体温も三十八度二分食慾無く渴き甚しき様には御座候へども元気変りなく医師より許可を得て、《蓋ろ重湯の代りとして》アイスクリームを食し候。右牛乳、卵、塩等は差し入れ、氷及器械は病院の品を用ひ附添つぎそいの者之を作り今後も毎日之を取るべく候。」

この妹への優しい思いが、後に執筆される『春と修羅』の中の感動的な「永訣の朝」(1922年)で歌われ



写真4. 「春と修羅」(復刻版)

る“天上のアイスクリーム”へつながっています。カステラなど、トシが好むものも差し入れ、何とかトシを回復させようと懸命に努力している兄の様子を想い浮かべると、涙が出てきます。トシは、賢治にとって「信仰を一つにするたったひとりのみちづれ」（「無声慟哭」）であり、宮沢家の中ではただ一人兄の最大の理解者でした。兄と妹の深い絆を感じることができます。

1月8日には、トシはやはりインフルエンザであったと報告しています。これが、スペイン風邪でありました。

「尚主任医師にも相尋ね候処、矢張主なる病氣はインフルエンザにて他に肺の一心臓等弱り居る為熱の降る事余りはかばかしからぬものなる由に御座候。」

スペイン風邪とは1918年～1920年に流行したA型インフルエンザウイルスの感染によるものです。1918～1920年は第一次世界大戦直後で、スペイン風邪の終息までおよそ3年の歳月が必要でした。もともとA型は鳥を中心に広がっていたウイルスで、人には関係ありませんでしたが、突然変異により人にも感染するようになり、大流行してしまいました。スペイン風邪の流行源は不明ですが、初期にスペインから感染拡大の情報もたらされたため、この名でよばれています。感染者数は世界で6億人、死亡者数は2000万人を超えたと推定されています。日本では感染者数が2380万人、当時の日本人口が5473万人でしたのでおよそ人口の半数以上が感染し、死亡者はおよそ38万人に達したと言われています。2020年に世界的に流行した新型コロナウイルスによる世界の感染者数と死者数は、2021年3月現在それぞれ1億2800万人と280万人です。

1919年の1月の終わりころになると、賢治の妹トシの体温は平熱に下がりはじめ、退院への道が開けました。1月28日の手紙では、興味深いことを報告しています。

「当地は感冒流行の噂は聞き候へども成程と思ふ様の事には未だ会はず候。但し往来には仁丹を少しづつ嘔み、帰宿後は咽喉を^{そそ}ぎぬる様の日は外出を見合わせ随分と注意いたし居り候」

と書いています。

賢治は感染防御のために防護服を着て、消毒液で手洗いし、仁丹で予防し、うがいを励行し、外出を控えて嚴重な注意をしていたことがわかりますが、マスク着用やソーシャルディスタントをとっていたかどうかはわかりません。しかし、注意深く日々を暮らしていたため、賢治は幼少から病弱であったにもかかわらず、インフルエンザ、す



写真5.「春と修羅」内、「永訣の朝」の部分

なわちスペイン風邪の感染から逃れることができたのではと考えられます。

当時の仁丹は粒の大きな赤い丸薬でした。携帯性・保存性を高めるため表面をベンガラ(酸化第二鉄(赤色酸化鉄、酸化鉄(III)、 Fe_2O_3))でコーティングした「赤大粒仁丹」であり、1905年(明治38年)から発売されていました。主要な成分は甘草(かんぞう)、阿仙薬(あせんやく)、桂皮(けいひ)、和桂皮(わけいひ)、茴香(ういきょう)、生姜(しょうきょう)、丁子(ちようじ)など十数種類が含まれていたようです。現在の「銀粒仁丹」は、1929年から販売されていますので、賢治は「赤大粒仁丹」を使っていたと思われま

す。「銀粒仁丹」は銀箔でコーティングされていますので、殺菌効果があるとされています。1粒に16種類の生薬が配合され、さわやかな清涼感で気分をリフレッシュしてくれるので、私も愛用しています。銀のコーティングが口腔内で一部がイオン化すれば、銀イオンがコロナウイルスのタンパク質のシステインやメチオニンなどの含硫黄アミノ酸に結合してウイルスを不活性化するかもしれませんが、実証があるかどうかは分かりません。



トシは、1919年3月に花巻へ帰ることができました。健康を取り戻し、1920年9月下旬より母校の花巻高等女学校で教諭心得となり、英語と家事を担当していましたが、1921年6月ころに再び体調を崩し、実家で静養します。当時、花巻の宮沢家の近くに住んでいたキリスト教徒齋藤宗次郎の著書『二荊自叙伝』によると、トシの父政次郎から、1922年1月に「液体オゾン」の購入を依頼されたと書かれています。宗次郎が一時肺炎で倒れたときに用いた「液体オゾン」で健康を取り戻したことを聞いた政次郎が、それをトシにも取り入れようとしたと考えられます。娘の健康を願って、藁にもすがる父の思いにも涙します。しかし、医師や家族の懸命な看病にもかかわらず、1922年11月27日夜にトシは24歳で死去しました。父母と賢治や妹たちの悲しさの深さは計り知れません。妹を失った賢治の怒りと深い悲しみは、『春と修羅』の「永訣の朝」、「松の針」、「無声慟哭」3部作から知ることができ、感動がこみ上げてきます。

先に挙げた齋藤宗次郎は、キリスト教思想家・文学者・伝道者の内村鑑三の弟子の一人で、その死に至るまで身の回りの世話をしたことで知られていますが、鑑三が病に伏して最後に宗次郎に手渡した紙にも、コムパウンド・オキシジン(化合酸素)を手に入れてほしいとあります。コムパウンド・オキシジンは液体オゾン(O_3)のことです。鑑三も、宗次郎が液体オゾンで病気から回復したことを聞いていたからです。

医療用オゾン発生器は、1923年に小川正彦により発明されたことが伝えられています。詳しいことは分かりません。宗次郎がオゾンを用いたのは1900年ころと思われるため、当時は民間療法の一つとして販売されていたと考えられます。ヨーロッパではドイツで1957年に発明されています。オゾンは、感染症、皮膚病、免疫不

全、がんの補助療法、老人病、慢性リウマチ、アレルギーなどに有効性が示されていて、クオリティ・オブ・ライフの改善が見られるようです。

賢治は、花巻農学校の教諭時代(1921～1926)にはタバコを吸っていたと、同僚の白藤慈秀が回想しています。当時は、あたりまえのことでありました。このころに撮影された写真には、花巻農学校の職員室でダルマストーブを取り囲んで団らんする教諭たちの姿が残されています(上田 哲他4名『図説 宮沢賢治』p.90、河出書房新社、1996年)。写真のほぼ中央で、賢治はタバコらしいものを右手に挟んでいます。これはタバコではなく「オゾンパイプ」であると、澤口たまみは紹介し、賢治が結核を気にしていたと補足しています。上に紹介した「液体オゾン」や「コムパウンド・オキシジン」と同じものではないかと思われます。ネットを覗いてみたところ、「オゾンパイプ」がかつて使われていたことを知りました。

“本剤は強烈な酸化・殺菌力を有し、その力は酸素の3000倍に相当す。”とローマ字で書かれています。また、昭和6年(1931年)4月11日の読売新聞には、その広告も出されていますので、よく知られていた健康器具だったかもしれません。今から考えれば、かなり危険な健康器具と思われます。科学的に物事を考え、常に病気を気にしていた賢治がこのような「オゾンパイプ」を本当に使っていたのかは疑問が残ります。もしそうであるとすれば、斎藤宗次郎の影響は多大であったと想像されます。

最後に、賢治が弟の清六に宛てた手紙の一部を紹介して終わります。新型コロナウイルス感染が流行している中で日々を過ごす私たちに心の安らぎを与えてくれるようです。

「苦痛を享樂できる人はほんたうの詩人です。もし風や光のなかに自分を忘れ世界がじぶんの庭になり、あるひは惚として銀河系全体をひとりのじぶんだと感ずるときはたのしいことではありませんか。(大正14(1925)年9月21日 宮沢清六あて封書より)」

[参考]

- (1)『宮沢賢治全集』全10巻、ちくま文庫(1986年)
- (2)校本『宮沢賢治全集』全13巻、筑摩書房、昭和49年(1974年)
- (3)宮沢清六『兄のトランク』ちくま文庫(1991年)
- (4)斎藤宗次郎『二荊自叙伝』(上下)、岩波書店、2005年
- (5)白藤慈秀『こぼれ話 宮沢賢治』、杜陵印刷、1981年
- (6)澤口たまみ 新版『宮沢賢治 愛のうた』、夕書房、2018年
- (7)<https://www.tpa-kitatama.jp/museum/museum/20.html>(北多摩薬剤師会HP)
- (8)桜井 弘『宮沢賢治の元素図鑑』化学同人(2018年)

写真2～5は、大阪市博物館機構の小野昌弘氏よりご提供いただきました。お礼申し上げます。

桜井 弘